

その少女危険につき取 り扱い注意

ニヤイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

誰しもが持っている念能力。普段は眠っているが、呼び起こせば人ならざる脅威な力が手にはいる。

その念を更に強くするには制約と誓約このふたつが必要である。

制約は念を使う上で決める約束

誓約はそれを守ることを誓うこと

本来これは自身、つまり自分自身へしか使えない。

リスクもおおきい上に危険だ。

だが、あるどこかに棲む一族には稀生まれた時から念能力を使えるものが産まれる。

しかし、使えはするものの自分では制約と誓約をする事ができない呪いがかけられていた。

そう、その物は他人と制約と誓約を交わすことによつて、交わしたものと自身の念のオーラを強くすることが出来る。しかし、伝説とされていた…。

その伝説の少女がゾルディック家にやつて来た。

イルミはその少女の世話を父親に言い渡された。

その際

少女への攻撃をどんな手段でも一切禁止と言い渡された。

命令に従い育てることにしたのは良いのだが…まさか頭を悩まされる日が来るとは知らなかった…。

目次

白い少女と黒いイルミ	1
その少女育成される	6
その少女育成されました?!	9
その少女念の修行開始	13
リリーのプロフィール	16
少女ハンター試験を受ける	20

白い少女と黒いイルミ

某時刻

イルミールゾルディックは大きな暗殺の仕事が片付き、報告のため父シルバの居る実家へ来ていた。

イ「父さん入るよ。」

いつもより大きな仕事だったが特に問題なく終えられた事を、父さんに報告した。

シ「そうか、ご苦労だった。暫く休んでもいい。」

? 「うー……?」

暫く、おそらく次の仕事に来るまでであろう。

イ「わかった。……所でさつきから気になってたんだけど父さん、それ……なに?」

父さんのそばでポロポロの服を着て座ってるやたら真っ白なヤツを見て、……ミケの餌

? 足りなく無い? と聞く。

シ「違う……! 実はだな……」

? 「あー……うー?」

そのやたら白いヤツ：どう白いかと言うと。

白い髪、白い肌、白の目、どれをとつても白だオマケに猫を連想させる獣の耳までついている。汚れているところを無くせば雪の中にたつてもわからなくなりそうな程に。どうやらそいつは報酬の一部だったらしい。依頼してきた人はお得意さんでいつかゾルディック家に役に立ちますと言ひ渡されたのが、この白いヤツ。

伝説の一族の末裔であり中でも特上とか。

イ「ふうん：確かに念は感じられるけど…。大したことないんじゃない？」
あんまり役に立ちそうもないな…。

近くで見ると益々白い…。しかし父さんと、ここに居ると言うことは普通ではないことはわかった。

目が合うとその白いヤツは自分を見て首を傾げるだけだ。知能も低そうだ。

シ「ずっと閉じ込められてたらしくてな。拷問の訓練も一通り済んでいるらしい。だが勉強などは教えてないからすり込めものになるという事だ。イルミ、お前こいつ育ててみないか？」

きつと気に入るはずだ。

イ「父さんの命令なら従うよ。」

俺はその白いヤツを引き取ることにした。

シ「まで、イルミ。その少女への攻撃をいかなる手段を持つても禁止だ。危険すぎる」

攻撃をしてはいけない？何故、操らなければ使えないではないか。

イ「理由を聞いても？」

シ「少し試した結果…危うく家がなくなる所だった。と言えはわかるか？」

イ「……」

わかつたら行け、と部屋を追い出された。

インナーミッシヨンが適応されたということは、こいつは【家族】の1部となったわだ。

隣の白いヤツ。取り敢えず執事たちに綺麗にしてもらわないとな。

イ「着いてこい。今日から俺がお前の主人だ。」

？「う…？う…！」（コクコク

どうやら話だけは通じるようだ。しかし、やることは沢山だ。

暗殺の教育係は…俺でいいとして。

専用の執事やメイドをつけないとな…。

やることは山ずみだ…それにしても後ろをついてくるのを見ると。身体能力はまだまだのようだ。

近くに控えてる執事のゴトーを呼んだ。

イ「ゴトー、此奴を洗つといて汚いから。それから、聞いてると思うけど此奴は家族になった。配置は任せる4、5人つけてやってくれ。」

ゴ「畏まりましたイルミ様」

だが、白いのは動かなかつた。どうやら俺直接的な命令がない限り俺以外には従うつもりはないらしい。

イ「俺のところへ帰ってくるまでそのゴトーの指示に従え」

?「…う!」(コク)

ゴトー「お名前をお聞きしても…?」

イ「ない。今考える。」

少し待て…とゴトーらを待たせる。

名前まで考えてやらないとは…命令出なければ絶対にやってない。

呼びやすくして間違えなくていいやつ。

1番下になるのだから【とる】から始まるのがベストだろうが…いいのが全くない。血縁関係では無いのだから養子というところで別に繋がらなくてもいいだろう。

イ「リリイ…よし。お前は今日からリリイだ。」

適当に思いついた名前を白いヤツ…改リリイに言いつける。

リ「り……？」（キョトン）

……ダメだ。自分の名前も話せなさそうだ。

ゴトー「ではリリイ様此方へ」

繰り返し呼ばれば分かるだろう。リリイを見送ったあと、自室に向かい執事の手配をする事にした。

その少女育成される

イ「ふうん。見た目は悪くないんじゃない？白い瘰に黒や赤がよく似合ってるじゃないか。」

リ「い……う？いる……み……さま？」（ギユツ

イ「は……？なんで名前……？」

服を掴まれた上に名前を呼ばれたことに驚いて近くにいるゴトーを見ると

ゴ「申し訳ございません。恐らく我々の会話から覚えられたのかと……。」

手配の時や会話から覚えた……？この短期間で？

リ「いるみさま……」（グイグイ

知能は悪くないみたいだな。教えがいがありそうだ、早速ツボネに言葉や礼儀作法を

…

ゴ「イルミ様……リリイ様はどうやら空腹の様で、お食事

をご用意しても宜しいでしょうか？」

イ「好きにすれば。それとリリイは毒の耐性もあるみたいだけど……身体の調子を整え

る為にもリリイには俺が許可するまで、毒とか入れないで」

畏まりましたとゴトローが消える。

リ「いるみさまあ…グスツ…」

イ「はいはい…」

泣かれても面倒なのでその小さな身体を抱き上げソファに腰掛けて膝に乗せてやる。リリイの執事の手配をしてる時に少しだけ「普通の」育児サイトを漁った。普通はこうするのが正解らしい。ゾルディック家では有り得ないけど…リリイは膝に乗せただけで喉を鳴らして喜んでいる。喉鳴らせるんだ…。この獣の耳とか本物なのか？

リ「♪」(ゴロゴロ)

イ「ふうん…耳とかほんとに生えてるんだ。興味深い…。ミルキに見せたら喜びそうだね。」(モフモフ)

少しリリイを弄ってる間にツボネ達が揃った。

ツ「リリイ様、イルミ様の命令により教育係となりましたツボネに御座います。主に礼儀作法、知識を担当させて頂きます。」

シ「シズネに御座います。イルミ様の命令により、世話係、お遊び相手をさせて頂きます。」

ア「アギトに御座います。リリイ様のお食事を担当させて頂きます料理人に御座います。」

主に3人をリリイに付けることにした。その他にも居なくはないが殆ど関わることは無いと思うし、この3人に任せることにした。

イ「うん。リリイの事は君らに任せた。暗殺に関すること念能力については俺が時を見て教える。それ迄はリリイに絶対に触れさせたり関わらせないようにね。

普通の人として育成しろ。マニユアル等は自分で調べるんだね。

それとリリイ、この3人はお前の執事と教育係だ。命令：ゆうことを聞くんだよ？俺は出掛けてくるから。」

リ「う……！」（コクコク

イ「それじゃあ、これから出るからお前達此奴頼んだよ。いつ帰るかは分からない。だけど何かあれば都度連絡を入れろ。最低1日1度だ。」

ツ・シ・ア「承りました。」

さて、前々からヒソカに呼ばれてたし。その間に、ものになればいい。俺は闇に消えた。

その少女育成されました?!

リ「おはようございますです…!」

ツ「違いますリリイ様。では必要ございません。もう一度、おはようございます」

先ずは喋れなければ教えることも出来ない、言葉の習得は最優先事項だとツボネは判断した。

前情報によると覚えは悪くないらしいと聞かされた…。

ツボネは未恐ろしいと思った。恐ろしく覚えが早い、恐らく余計な単語を教えたりすれば簡単に覚えてしまう程に。

表に書いた単語や五十音を照らし合わせながら行っている言葉の練習も、意味を理解してゐるかはさて置きにしても違和感なく喋ることが出来た。

普通の会話ができるのにさほど時間はいらなかった。
その時間およそ半日…。

ツ「イルミ様にお伝えしなければなりません…。語学はマスターされたと…。」

リ「イルミ様? ツボネ! イルミ様帰ってきてるの?」

ツ「いえ、メールにての伝達ですリリイ様、イルミ様はご帰宅なさっております。さ

て、お次は作法のお時間です。昼食をとりながらお教え致しますよ。」

リ「はーい！」

〈昼食〉

リ「お魚のお料理にはこのカトラリーを使うのね？」（モグモグ

ツ「はい、リリイ様。教えた事をすぐさま実践できて、恐れながら聡明でツボネは嬉しゅうございます。」（ニツコリ

リ「そう？ツボネの教え方が上手いからよ。」（モグモグ

でも、食べながら喋るのはマナー違反です。と窘める、褒める所は褒め叱る時は叱る。マニユアル通り育てても、常人ならざるスピードで習得するリリイに舌を巻くばかりだ。

リ「食べながらはマナー違反。わかった。」（コクコク

そう言い静かに食事を始めたリリイ。

ツ「淑女はおかわりなどはしません。常にお淑やかに騒がない慌てたりなどは以ての外です。ゾルディック家は特別なのです。」

リ「わかった。」（コクコク

食事を終えて礼儀作法を学ぶ。ツボネはこれもまた数時間もすればマスターするであらうと…。

そして其れはすぐそこまでできていた。

リリーの底知れぬ学習力にて、その後僅か2日程で語学、礼儀作法をマスターしたり
リイは敷地で遊んでいた。

シ「リリー様あまり走ると転ばれますよ…!」

リ「大丈夫ー! シズネも早くー!」

遊ぶことで時間を潰す事にした。

〈その頃イルミ〉

イ「…へえ。面白くなりそうだ。」

ヒ「君がキルア以外に興味のある子ってどんな子だい? 気になるねえ…♥」

イ「父さんの依頼報酬で持て余してるのを、俺にくれたんだよ。」

いつものBARで酒を飲みながら話をする。

ヒ「でも念が使えるんだろ? 僕にも合わせておくれよ…」

イ「お前に合わせるよ、ろくなことにならなさそうだけど。勝手に接触されて変なこ
とを教えられても困るし…いいよ。ウチくる?」

その代わり余計なこと教えないでよ? とねんをおすのをわすれない。

ヒ「楽しみだなあ…♥」

〈その時リリー〉

リ「イルミ様…遅いなあ。」

シ「リリイ様はイルミ様がお好きなんですネ。さあそろそろお休みの時間ですよ。明日はお会い出来ると良いですね。」

リ「うん！イルミ様名前くれただから好き！起きたら会えるかなあ…」
ベツトに入りイルミの帰りを心待ちにしていた。

その少女念の修行開始

リ「イルミ様！おかえりなさいませ！」（ゴロゴロ

イ「ん、帰ったよ。」

ヒ「この子がリリイちゃんか♥なかなか美味しそうだねえ…」

イルミに近づき喉を鳴らして喜んでいる。ヒソカには気がついてないと言うより…無視してるようだ。

イルミに頭を撫でられてるリリイをはヒソカには目もくれず、イルミの服の裾を握って嬉しそうに撫でられていた。そんなリリイを見てちよつとだけヒソカは傷ついていた。

ヒ「イルミ、リリイちゃん僕の事は無視かな♥？」

どんな教育してるんだい？と言いたげな目でイルミを見るヒソカ。

イ「本能で危ないやつだとも思われてるんじゃない？リリイ今日からは俺が傍についてわからないことを教えてやる。」

リ「はい！」

イルミはリリイを抱き上げ、ヒソカとともに訓練所に向かう。

〈訓練所〉

イ「先ずは水見式で、なんの系統か調べないとね。じゃあ、リリイこのグラスを包むように発をしごらん。念をまとってるんだ使えるはずだよ。」

リ「発…こうですか？わっ…!？」

リリイがグラスを包むようにオーラを出すと…葉っぱがクルクルと周りだし腐敗し中の水は沸騰し始めた上にグラスは溶けてしまった。

ヒソカ「これはこれは…見事な特質系だね♣？他の系統には見られない現象だ。」

イ「特質系…回り出した時は俺と同じく操作系だと思っただけだな…。」

リ「イルミ様特質系とは何ですか？私はイルミ様と同じく操作系…？とやらになりたいです…。」

リリイは念能力の性質をまだ理解していなく、何故自分は主人と同じでは無いのか、自分は変なのかと不安になっていた

イ「残念だけど念能力の性質は生まれながらに決まっていることが殆どだ。でも、リリイが操作系がいいなら特質系は全系統を使えるからなれなくもないよ。操作系は俺が付きつきりで教えられる。そうそう、変化系はそこに居るヒソカに教わるといいよ。」

ヒ「面白そうだねえ♥果実を自分で育てるなんて♪僕はヒソカ、リリイちゃん改めてよろしくね？」

リ「ヒソカ？ふうん。ねえイルミ様！他にも何か系統があるのですか？」

ヒ「……僕泣いてもいいかいイルミ……」

ここまで来ると流石に僕だって傷つくんだけど？とイルミに助けを求めたヒソカにリリイに他の系統があるかを説明しながらイルミはため息をついて、仕方ないねと呟き

イ「リリイ、一応ヒソカはお前の変化系の師匠だ。こいつのことは嫌いかもしれないが、ちゃんと敬意は見せてやれ……」

リ「成程、わかりました！ヒソカ師匠よろしくお願いします！」

ヒ「ヒソカでいいよ♥僕もリリイちゃんって呼ぶからさ♪」

そして、リリイへの念の修行がようやく始まった。

イ「まずはゾルディック家の仕事について説明する。ゾルディック家は代々暗殺を職業としている。そこで、絶、暗歩、暗歩の応用の肢曲（しきよく）は必須科目だ。」

それじゃあ、修行開始だ。

イルミとヒソカによるリリイへの修行が始まった。

リリイのプロフィール

リリイ

性別 女の子

身長 145 cm (少し伸びた)

体重 非公開

年齢 17歳 (推定)

髪型 腰までの白に近い薄銀髪ロングヘアで少し毛先が跳ねてるくせつ毛毛先がピンク

種族 まだ不明

好きなもの 棒付きキャンディ 宝石 (特にルビー) イルミ様

嫌いなもの ネバネバしたの 苦いもの

念能力

特質系 甘い手と黒き采配 (マジカルキャンディ)

カウンター型攻撃。相手の攻撃を「手」で受け止めるまたはガードすると相手のオーラをその後少しづつ奪っていく。オーラは使用者の持つステッキの下に着いてるたま

の中に溜まっていく、その玉はオーラを貯めると色が変わり5段階まで貯められる。

赤↓黄↓オレンジ↓ピンク↓黒

黒になるとそれ以上溜められなくなり、貯めようとしても貯まらないためダメージを受けることになる。

溜まったオーラはいつでも取り外し可能で、触れることで使用者はこれをお菓子に変化させて捕食出来る。捕食したオーラは3分間に使用者のものとなる。使えばなくなる。使用者が強くなるにつれて使用できる時間は伸びる。最大1時間

強化系 慈母の手（ヒールハンド）

手で触れたものの破壊された部分を死なない程度のキズならたちどころに治る。

操作系 無慈悲な指揮者（エンドロール）

針で刺したものを自身のもつタクトで操る。

一度に4、5人迄操れる。

具現化系 黒き審判（ダークスネイク）（名チロン）

具現化した三目をもつ赤目の黒蛇。（念獣）

狭い所の探索が出来視覚共有と聴覚共有ができ、攻撃はできない。

普段は閉じている三つ目の目を開くと相手が嘘をついているかが分かるが。使用者より強いものの嘘を見抜くことは出来ない。満月の時しか開けない。

変化系 追尾する斬撃（アウトサイドカッター）

斬撃をブーメランに変化させ攻撃する。連続で当たるほど威力が上がる。避けられても、ブーメランのように戻ってきて後ろから敵を攻撃する。

持ち物

横かけ鞆（遺物で生き物以外は何でも入る）3つ入り口がある。

1 箇所目の中身

ミニナイフ

毒ナイフ

ペンチ

ハサミ

カッター

針（戦闘用）

毒瓶

煙幕玉

火打石

2 箇所目

お菓子たくさん（ほぼ飴）

3ヶ所目

宝石（ひとつずつ小袋に丁寧に入れてある）

ハンカチ（磨用）

イルミ様とお揃いの針（刺さらないように改造済み）

着替え2、3日分

首から紐にケータイをぶら下げてる（みるき作）チョコロボくんのストラップが沢山着いてる。

何処でも圏外、盗聴、盗難、等の心配が無いように作られてる。

いまだ種族は、判明しておりませんがストーリーで明らかにします。

少女ハンター試験を受ける

ハンター試験会場近く最寄り街宿にて

リ「さて：準備はこれでもいいか。」

自慢の髪をおさげにして薄く化粧をし、メイド服を身にまとい黒のタイツを履いた足に真っ赤な靴を履きカバンを肩にかけ準備している。これから師匠のヒソカとハンター試験へ向かうのだ。

この数年、リリイは成長した。ヒソカとイルミによる修行により出会う前より格段に強くなっていた。それでもまだ底知れぬ強さを秘めていると二人の師は確信していた。

そんなイルミはリリイの修行を弟キルアを連れ戻す為、中断すると言い渡しヒソカにリリイを預ける事にした。何時でも連絡が取れるようもう一人の弟ミルキに作らせた携帯をプレゼントした。仕事を外でも受けられるようにと。

そして、ヒソカに誘われハンター試験を受けることにしたのだ。別になくてもよかつたのだがリリイには探さなければならぬものがあつた。

ひとつは

リリイにはイルミと会う前の記憶が無かつた。その記憶を最近断片的にしかも同じ

夢を見るようになってきた。その中にいる人はいつも同じ事を言うのだ。

「交わせ制約を交わせ誓約を、己の真の力底にあり」

その言葉の意味を知る為にも過去を全て把握する必要があるからだ。

ふたつめは

どこに何をしに行くにも便利だからだ。ライセンス取得さえしてしまえば暗殺の仕事をするのにも箔が付く。

準備を終えたリリイをヒソカは玄関前で迎えた。

ヒ「準備できたみたいだねえ♥リリイちゃん行こっか」

リ「ちゃん付けないでもらえます？変態師匠。」

殺すよ？と針を向けると変態師匠：とこヒソカは、心底楽しそうにニヤニヤするだけだ。全くやりづらい…、こっちが本気じゃない所を見抜かれてるのは腹が立つ。

ヒ「そんな可愛くなく育てた覚えはないんだけどなあ♥」

リ「良いからとつと会場に行きますよ。」

ヒ「はいはい♥」

〈そして試験会場にて〉

ヒ「僕は44番、リリイちゃんは45番だね♥」

リ「ハア…：会場に着くまであつけなすぎ…。師匠、終わるまで別って事で。」

靴からお気に入りの棒の飴を出して食べながらリイは退屈そうにため息をつき師匠に手を振った。今日の飴はいちごみるく味だ。

後ろからつれないねえなんて聞こえた気がしたけど無視だ。

因みに入ってきた時に、トンパとかいうやつが話しかけてきたけど毒入りジュースを堂々と配るなんて、馬鹿みたいな奴がいたがガン無視してやった。飲んでも効かないが飴の方が美味しいし好きだ。

リ「〜♪」

お気に入りの飴を食べながらイルミ様から貰った携帯で仕事をチェックする。特に急ぎの仕事はないようだ。今は耳も尻尾も隠して居るため、はたから見たら私は普通の人しか見えないだろう。

飴も舐め終わり適当に時間を潰していると、スーツを着た青年と民族衣装の青年に活発な少年に声をかけられた。

レ「その可愛いお嬢様！俺はレオリオってゆうもんなんだがな…！」

ク「おい！レオリオいきなり失礼だろう！すまない、私はクラピカと言います。連れが失礼を…」

ゴ「すつごい！キミ白いねえ…！」

騒がしい連中だ。でも、そこら辺のやつよりは面白そうだな。

リ「リリイよ。何か御用かしら？」

形だけの挨拶を済ませると、ゴンとかいつ奴が握手を求めてきたため応じながら私は首をかしげた。

「どうやら私が師匠…ヒソカと居たというのを聞いてどんな人か気になったので聞きに来たらしい。」

リ「師匠よ。私の」

ゴ「へえー！じゃあ君強いんだね！」

ク「危なくないのか？なにか脅されてるのか?！」

レ「まともに話を通じるようには見えないけどな…。あれをしろよ…！」

視線を向けるのちちょうど師匠が他の受験生の両腕を消し去った後だった。

リ「まあ、すぐ殺そうとはしてはくれるけど問題ないわよ。」

問題あるよ!?!と三人からいきのあったコメントを頂く。

ゴ「そうだ！リリイさんも僕らと一緒に行動しようよ！」

ク「そうだな、大勢の方が迂闊には手を出してこないだろうからな…」

レ「そりゃあいい考えだ！」

暇だしな…暇潰しには仲間なんてのも良いかもね。

リ「いいわよ。よろしくね」

お近づき、と鞆から飴を渡すと快く受け取ってくれた。
そして試験官らしき人が現れた